

SSKO

栃木ダルク

ニュースレター 第92号(2010, 12, 10)

Grow up!!

Drug Addiction Rehabilitation Center
DARC

死に至る病

栃木 DARC 代表 栗坪千明

薬物依存のリハビリ施設を開設して、早7年が過ぎた。初めは7人でのスタートだったが、現在は40から45名メンバーが回復プログラムを受けられるようになった。その間様々な薬物依存者と接してきた。中には死んでいった人たちもいる。薬物依存を語る時「自業自得」という言葉が見え隠れする。自分で好きな事をやって勝手に病気になったのだから、死んでも仕方がないのではないか。という見方がまだまだ一般的である。確かにおもしろ半分で使いだして、いつの間にか依存症になっていたというメンバーもいる。しかし大多数の人たちはそれだけの理由で数ある「嗜み」の中から薬物をチョイスした訳ではないのも事実である。薬物依存には「自己処方」という側面があるのも事実だ。子供のころから夫婦喧嘩の仲裁を強いられたり、毎日のように親の離婚の恐怖に脅かされたり、人によっては親の夫婦間の悩みを延々と聞かされ続けたりなど、家族の関係性において子供にとっては過度なストレスを抱え、それが自分にダメージを与えている事など感じずに育ち、思春期にちょっとした事がきっかけで出会った薬物に自分を癒してくれる効果を認め、そのまま自分に対し薬を処方するかのように使い続けるのは自然の成り行きではないかと感じる事もある。

なによりこの薬物乱用という遊びは死に至る可能性があるという危険なものである。そして施設に入ってくるメンバーはそのリスクを知らずに使っていた訳ではないというところにこの病気の難解さがある。どの薬物も乱用を続ければ脳の機能が変化し、依存状態に陥る。それを通り越すと精神症状が出た、覚せい剤なら覚せい剤精神病、大麻なら大麻精神病になっていく。そうなる危険を感じながらも、薬物の使用を止める事が出来ないのである。薬は使い続けていくと耐性ができ、薬の精神への作用は軽くなっていき「初めは飲めない酒もだんだんと強くなっていくのと同じである」使っても思っているような効果が得られなくなる。あるメンバーは「使って使わなくても同じなのに使ってしまう自分が情けなくて、泣きながら使っていた。」と話していた。なによりこんな生活を続けていくと生に対する意欲がどんどんなくなっていき、死に対する恐怖が薄れていく、まさに死に至る病なのである。このように原因は様々だが、必要なのは今起きている問題をどうするかなのである。

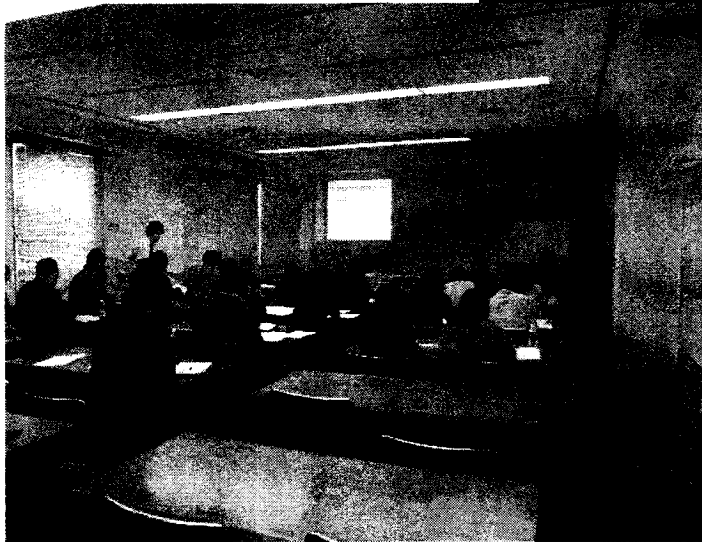
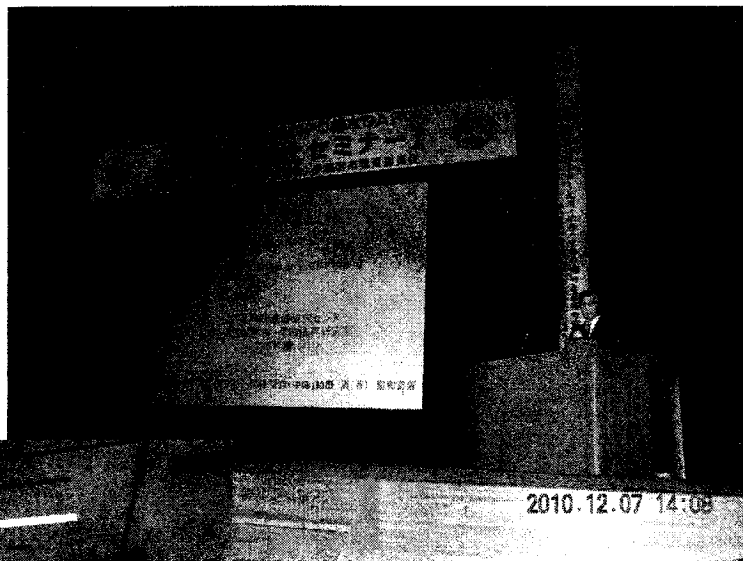
施設で行っている回復プログラムは正の強化と負の強化を織り交ぜたものであ

薬を使うことによって起きた社会的、肉体的、精神的ダメージを思い起こし、話す事によってできる負の部分の強化と、使わなくなって取り戻したものを実感する正の部分の強化を、1年3ヶ月、長い者は2年から2年半の年月をかけて繰り返し行う事によって、脳の機能を効果的に取り戻していく。これによって、同時に生きていく気力も取り戻していき、依存症になる前よりも生き生きとして社会に戻っていく。

このようなドラマが薬物依存からの回復の現場では日々起きている。薬物とは関係のない世界で生きている人たちにも、「薬物乱用はダメ絶対」だけではなく、もっと知ってほしい事実である。

22年8月1日 下野新聞（日曜論壇）掲載

宇都宮市との協同事業（薬物乱用防止セミナー）で和田先生の基調講演の様様です。



厚労省の社会資源及び社会制度に関する研究会に参加しました。